



# ひろうら

茨城町立広浦小学校  
学校だより  
平成28年2月3日発行  
第33号

## 児童の話合い・自主的な活動 思いをかたちに



2/20(土)の広浦小学校閉校記念式典に向け、子供達が思いをかたちにしようとしています。

4,5年生は、本校創立からの写真の中から何枚かを選び、本校の過去・現在を振り返ったり紹介したりしようと写真に合うコメントを考えています。時間を見つけては、自分たちで話合いを進めているところです。(左写真)

6年生は、国語の学習の発展で、アンケートを基に考えをふくらませ、広浦の未来について自分たちの考えを伝えようと準備をしています。

低学年も、これまでの学習等をバージョンアップさせ、来ていただいた方々へ感謝を…と練習を始めたところです。

昼休みの音楽室からは、式典等でピアノ伴奏をする子供達のすてきな音色が聴こえてきます。

現在、本校のいたるところで、子供達の自主的に活動する姿がたくさん見られます。2月は、これまで以上に、子供達が主役の月になりそうです。

## おはようございます

昇降口の朝の風景です。低学年を中心に、あいさつ運動が行われています。あいさつが習慣として育っていなかったのか、寒くなってきて声が小さくなってしまったのか、「元気なあいさつ」が、3学期のスタート時の課題でした。「元気なあいさつができる子」に育ってほしいという、担任の思いをあらためて聞いた低学年児童が立ち上がり、あいさつ運動が始まりました。低学年の子たちに、「おはようございます」と元気にあいさつをされ、少し気恥ずかしい様子の見られた高学年児童も、元気にあいさつを返すようになってきています。

ところで、ご家庭でのあいさつの様子はいかがですか? 「おはよう」「いただきます」「ごちそうさまでした」「いってきます」「ただいま」「おやすみなさい」など、これまで以上にあいさつの輪が広がりますように…。



## 思考をこらした 給食集会



1月24日から30日までの「学校給食週間」に合わせ、ボランティア・給食委員会児童による集会が開かれました。給食補助をしてきている五嶋先生への感謝の思いを込めた贈り物や完食児童への完食賞贈呈が行われました。

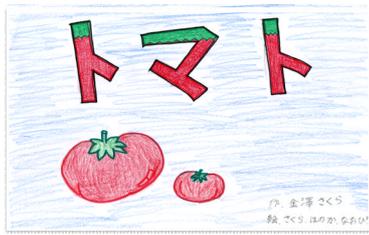
その後、電子黒板に絵を映し、オリジナル紙芝居の読み聞かせがありました。嫌いな食べ物や残してゴミになっていく食べ物などについて余韻を残す紙芝居に、児童はもちろん、私たち職員も考えさせられる時間となりました。

自作紙芝居「トマト」  
作：6年 金澤さくら  
絵：6年 金澤さくら  
4年 西山銀士

4年 海老澤歩乃花

裏面に紹介します。

1



ぼくは、両親を亡くしておじいちゃんとおばあちゃんと田舎で暮らしていた。おじいちゃんは、野菜畑で毎年、季節ごとの野菜を育てていた。そして、今は夏。おじいちゃんの畑はピーマンやナス、とうもろこしなどいろいろな種類の野菜があった。ぼくはおじいちゃんの野菜がどこの野菜よりも好きだった。だけど、おじいちゃんの野菜でも嫌いな野菜が一つだけあった。ぼくは、「トマト」が嫌いだった。

なぜ、トマトがきらいなのか自分でもよく分からないけれど、たぶんあの時のトラウマが原因だと思う。

2



ぼくがまだ小さくて両親が生きていた頃の夏、おじいちゃんがぼくの家野菜を届けてくれた。  
「おじいちゃん。この赤いの何？」

ぼくはまだ、野菜のことをあまりに知らなかった。するとおじいちゃんは、

「これはトマトだよ。食べてみるか。」  
「うん！」

少し食べてみたくなかったぼくは、おじいちゃんに頼んで食べやすいように切ってもらい一口食べた。すると、まずくて気持ち悪くなり吐いてしまった。それ以来、トマトを見ると気持ちが悪くなってしまふ。

ぼくは、収穫するときも他の野菜は手伝うけれど、トマトだけはやりたくなかった。そんなぼくを見たおじいちゃんもあきれたように、

「小さい頃のことだろう。もうそろそろ食べてみてもいいんじゃないのか。」

と、言う。でもぼくは、やっぱり食べる気がしない。

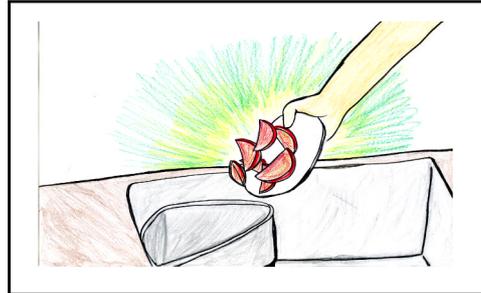
3



ある日のお昼。ごはんにはトマトが出てきた。そしておじいちゃんが、  
「少しは食べてみなさい。好き嫌いがあるまま大人になったら、ろくな大人にはなれないぞ。」

そう言ってトマトをぼくに寄せてきた。ぼくは少しだけ食べてみようと思ったけれど、やっぱりだめだった。

4



ぼくはトマトを見るのがいやで、目をつぶり思い切り流しに捨ててしまった。それを見たおじいちゃんは、

「食べ物はおやみに捨てるものじゃないよ。われらは命をもらっているんだ。ありがたく食べなきゃいかんよ。」

と、少しまじめな顔でそう言った。けれど、ぼくは、そのことばの意味があまり分からず、この重い空気から抜け出したいくなり、

「外に行って遊んでくる。」

と言って、走って外に出て行った。

5

ぼくは、おじいちゃんの畑に行って野菜を見ていた。トマトを捨ててしまったのは、少し悪いことをしたと思っていた。けれど、やっぱりトマトだけは好きになれなかった。そう思いながら少し歩いていると、畑でカエルを見つけた。そのカエルは、今とったのか幼虫を食べていた。それを見たぼくは、  
「幼虫かわいそうにな。後できれいなチョウになるのに。でも、カエルも生きていくためだからしょうがないか。」  
と、思った。そして、ふとさっきのおじいちゃんのことばを思い出した。

「そうか。ぼくも昆虫や動物と一緒に、命をもらっているから今も健康でいられるんだ。ということは、さっきぼくは命を捨ててしまったのか。」

あらためてぼくは、自分がやったことを悪いと思った。



6



そして、その日の夜、また、ごはんにはトマトが出た。けれどおじいちゃんには、もう何も言わなくなった。ぼくは、がんばって一番最初にトマトをはしでつかんだ。そしてぼくは、そのトマトを思い切り食べた。

この話は、ここで終わりです。この後、ぼくは、どうしたと思いますか。



# ひろうら

茨城町立広浦小学校  
学校だより  
平成28年2月16日発行  
第34号

## 体験 学びを 堂々と発表



式典での発表の様子

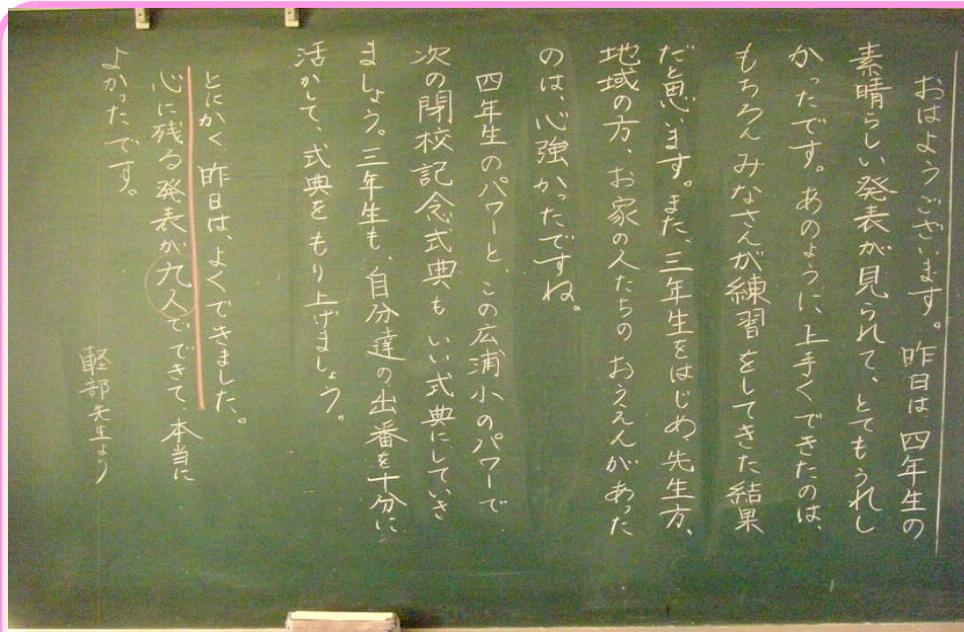
2月11日(祝) 町民の日  
記念式典 第4学年児童発表



発表を終えて達成感いっぱい

これまで総合的な学習の時間に、涸沼を中心とする環境についての学習をしてきた4年生児童が、体験や調べて分かったこと、これからの生活等を、たくさんの町民の方を前に堂々と発表しました。多くの体験をし、十分に考えたからこそ、自分たちのことばで堂々と発表することができたのではないのでしょうか。小林町長様からも、お褒めのことばをいただきました。様々なチャンス을いただき、また、成長した子供達です。

小林町長様から、お褒めのことばをいただきました。様々なチャンスをいただき、また、成長した子供達です。



**担任からの温かいメッセージ**  
町民の日の翌朝、三、四年複式学級の黒板に書かれていたメッセージです。本当なら直接思いを伝えてあげたかったのですが、朝から出張のため、前日の発表後に書きにきたのでしよう。発表をした4年生への思いはもちろん、3年生への感謝や期待：どちらの学年へも語りかけてい、複式学級担任の軽部教諭らしさを感じ、撮った一枚の写真です。

### <心強いことばをいただいて…>



1月に「朗読ライブ」をしてくださった朗読家の見澤様が、閉校記念式典に向けてのプレゼンテーション(4~6年「広浦小の過去,現在,そして、広浦の未来」)の練習に来てくださいました。見澤様からは、子供達が語りかけることばや選んだ画像に感動…など、心強いことばをいただきました。さらに、「これまで広浦小を卒業していった方々の思いも込め、今年の子達だからこそできる、他の人にはできない責任がある。思いを今日のように大事に伝えてほしい」とのことばがありました。子供達の顔はどの子も真剣で見澤様の話の一つ一つ噛みしめて聞いているようでした。当日は、今日の練習以上に、「思いが伝わる」ものになることと思います。

### お詫びと訂正

前号で紹介した自作紙芝居「トマト」の絵4年西山銀土さんは4年井上直宥さんの誤りでした。お詫びして、訂正いたします。大変失礼いたしました。



# ひろうら

茨城町立広浦小学校  
学校だより  
平成28年2月24日発行  
第35号

## 温かい学校 広浦小学校 ありがとう



(上) 小林町長へ校旗返還をする児童代表(谷ひより)

### 広浦小学校閉校記念式典 平成28年2月20日(土)

茨城町長 小林宣夫様、町議会議長 海老澤忠様をはじめたくさんのご来賓の方々にご臨席いただき、また、地域の方々や卒業生、保護者、旧職員等、300人を超える皆様に見守られ、感動と温かい雰囲気の中で、閉校記念式典を執り行うことができました。ありがとうございました。ご出席いただいた多くの方からは、次のような感想をいただきました。

- ・たくさんの方が思い出された。
- ・子供達の発表や姿に感動した。
- ・何度も涙が流れた。
- ・子供達の発表を聞いて、子どもに負けてはられない。自分も広浦のことをもっと考えなくては…。
- ・広浦の子はたいしたもんだ。
- ・小さな学校の大きな感動。感動的な記念式典だった。
- ・子供達に「ありがとう」と言いたい。

(右)「広浦の未来」について自分たちの考えを伝える6年生



#### 児童代表あいさつ

6年 福田 紘征

「広浦小学校って、あったかいですねえ。」  
広浦小学校を訪れた方々が、必ずといっていいほど口にする言葉だと聞きます。いったい何があったかいと感じたのでしょうか。

広浦小のあたたかさとは、環境であり、人であり、この地域に根ざした雰囲気なのではないでしょうか。

校門をくぐると、そこから見えるグラウンドは、雑草もなく安全面の行き届いた運動場です。また、きれいにレイアウトされた花壇。それらは、PTAや地域の方々を中心に、しっかりと整備されています。また、わたしたち児童も愛校タイムやちょこっとボランティア、委員会など、自分たちでできることを行ってきました。そして、川又さんのご指導の下、5年生が管理してきた広浦水田もまた、みんなで協力して活動してきたことを感じさせてくれます。

校舎に入ると、光が反射してまぶしいほど磨き上げられた廊下や、木で包まれたぬくもりの教室が、あたたかさを増してくれます。昇降口にあった広浦水族館は、涸沼をより身近に感じさせてくれました。

そんな素晴らしい環境の中で、わたしたち児童は、いつも穏やかな気持ちで生活することができました。学級でも全体の中でも、自分の考えを自由に発言でき、楽しい毎日を送ることができました。みんな笑顔が絶えず、何でも協力して活動することは当たり前のことでした。

工夫をこらした学校行事は、地域と一体となって開催していました。広浦小学校では、いろいろと貴重な体験をすることができたのです。

これらのように、素晴らしい環境や尊敬できる先輩たちの姿から、いつもあたたかな雰囲気が作り出され、自分たちもそれを目指してきました。

広浦小は閉校になりますが、広浦の雰囲気はいつまでも変わらないと思います。いえ、これからも、みんなで広浦のあたたかさを作っていきましょう。

